慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	本多庸一における「政治」
Sub Title	The meaning of "politics" in Yoitsu Honda
Author	小川原, 正道(Ogawara, Masamichi)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2012
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.85, No.8 (2012. 8) ,p.1- 21
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20120828-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

本多庸一における「政治」

小川原　正道

一、はしがき
二、出生、修学、洗礼へ
三、自由民権運動
四、「信仰」か「政治」か
五、キリスト教と武士道
六、むすびに代えて

一、はしがき

本多庸一は、近代日本を代表するキリスト者として、ひろく知られている。東京英和学校長・青山学院長を長く務め、社会的な活動や発言についてもきわめて積極的であった。筆者はかつて日露戦争時におけるキリスト教界について論じた際、桂太郎首相が本多庸一と面会し、キリスト教界に戦争協力を依頼した事実を記したことが

ある。当時にあって、本多は日本のキリスト教界を代表する人物であり、実際に本多は主だったキリスト者を結集して戦争に動員する体制を構築し、自ら戦地に赴いて伝道に励んでいったのである。(1)

こうした意味で、これまでの本多研究は、岡田哲蔵と青山学院による伝記(2)のほかは、キリスト者・教育者としての思想・活動に焦点をあてたものが中心であった。(3) 最近では、野口伐名が幕末から維新期にかけての本多庸一に焦点をあて、その津軽藩から日本国への国家観の変遷を明らかにしようとした論考を発表しているが、全体の本多研究の傾向においては異色である。(4)

本稿では、従来のキリスト教思想・教育思想の観点から本格的に本多をあらためて論じようとは考えていない。本多は嘉永元年に津軽藩の士族の家に生まれ、横浜留学中の明治四年に洗礼を受けてのち、弘前で教会の牧会活動を展開しながら自由民権運動に挺身し、青森県会議長として活躍した。そして牧師の道と政治家の道との間で迷った末に、前者を選択し、帝国議会開会の年（明治二十三年）、東京英和学校長に就任する。では、本多はなぜ信仰者と政治家との間で葛藤し、その両立を断念し、どのような信仰の道を選んだのか。遺憾ながら、これまで、こうした点に踏み込んだ研究は行われてこなかった。

そこで本稿では、本多庸一のキリスト者としての活動・思想について考察し、その上で、これと政治活動との葛藤の内実、そして選びとった信仰の道、その後の政治との関わりについて検討する。また、筆者はクリスチャン士族民権家の代表格ともいうべき片岡健吉の思想を考察した際、その内部において、武士道とキリスト教とが深い関係を有し、片岡自身がそれを強く意識していたことを確認した。(5) そこで本稿では、津軽士族たる本多における武士道とキリスト教の関係についても、視野に入れておきたい。

本多の資料については、本多の伝記を記した岡田哲蔵の収集した関係資料が、平成十九年に青山学院資料センターに収蔵されており、平成二十年には、弘前学院大学図書館がこれを除く岡田哲蔵旧蔵の本多庸一関係資料を

入手して、これを写真撮影したものを刊行している。[6] 長らくその停滞が指摘されてきた青森県の民権運動についての研究も、進捗をみせてきており、その成果も重要である。[7] これらの資料・文献を用いながら、右の課題について検討していきたい。

二、出生、修学、洗礼へ

嘉永元年十二月十三日、津軽藩弘前城下で、本多庸一は父徳三、母とも子の長男として誕生した。本多家は三河以来の徳川家臣で、三百石の名家であった。五歳の時から儒学を学びはじめた本多は、七歳から藩校稽古館に進み、優秀な成績を修めて十二歳で特選によって会読席（上級）となり、剣術、馬術、砲術なども学んで、一種の藩士エリートコースを歩んでいった。慶應元年、十六歳で稽古館司監兼手廻書院番職に抜擢されて藩吏の道を歩みはじめ、戊辰戦争に際しては旧幕府側に立った庄内藩との同盟締結にあたって使者の役割を果たしたという。津軽藩は結局新政府軍側につく形になったため、本多はいわば左遷される形で箱館に出張を命じられた。この際、本多は庄内藩との盟約を重んじるとして切腹を申し出たが、これが許されないと脱藩し、庄内藩に加わって新政府軍と交戦した。その後、脱藩の罪を許された本多は明治元年暮れに津軽に帰り、藩政に復帰、津軽藩の藩政の中核として会議局が設けられると、その十人の議員の一人に選ばれた。[8]

この頃、本多ははじめてキリスト教と接している。明治三年、漢訳の聖書と出会ったのである。本多自身は、友人が横浜から持ち帰ったものを好奇心から借り受けて読み、天地創造のくだりに強い衝撃を受けたと述べている。ただ、このときはこれ以上キリスト教に深く関わることはなかった。この年、津軽藩は前途有望な藩士六十名あまりを選んで横浜や長崎、薩長などに留学させ、洋学や英語を学ばせることとなり、本多は横浜に赴くこと

になった。横浜で宣教師「ヂョナタン・コーブル」、「ヘンリー・ルルミス」などに就いて英語を学びはじめた本多は、ジェームズ・バラ（James J. Ballagh）と出会うことになる。バラは開国当初から横浜で英語教授や聖書の和訳に努め、私塾を開いて自然科学や文学、歴史などを教えていた。英語のみを学習しようとした本多だったが、宣教師と接するなかで、自然と聖書にも触れていくことになる。[9] 本多はこの間の経緯についてのちに、次のように回顧している。[10]

> 一八七一年に、私は留学のため横浜に行った。ここで、私はアメリカの宣教師たちと接触する機会を得たが、そこでは毎日他の勉強をする前に、聖書を学ばなければならなかった。最初から、私は神の存在を信ずる信仰を受け入れることはできなかった。

この反発を和らげたのが宣教師の「Kindness」であった、[11] と本多は語っているが、こうした複雑な感情を抱いたため、明治四年に廃藩置県が断行され、学資を失った結果、弘前に帰ることになる。郷里に帰り、主家が没落し、武士もその地位を失った中で、本多は郊外に退いた自宅で、「非常に謙虚」な気持ちになり、「人間の本当の姿」を追い求めるにいたったと語っている。その際に念頭に浮かんだのが、あの聖書の教えであった。罪人としての自覚と責任。それを強く実感したとき、本多は再び横浜に向かい、明治五年二月、再びバラの塾に入門し、キリスト教について学び祈り求める日々を、植村正久や押川方義、そして井深梶之助などとともに送り、同年五月三日、本多はバラから洗礼を受け、二カ月前にできたばかりの日本基督公会に参加した。同会は、福音主義に立ちながらも、特定の宗派には属さず、あくまで聖書を信じるものによる共同体として独立自治主義を標榜する団体であった。いわゆる、横浜バンドの結成である。翌年頃からは日曜の午後に神奈川に伝道に出かけるように

なり、本多も説教に臨んでいる。七年には関東各県を巡回する日本人初の伝道旅行にも取り組んだ。[12] 八年には新設された横浜新会堂の「開廷式」にあたり、「切に要する処は諸兄弟各自一塊之煉火石となり互に憂え年度を以て相接続して霊なるの会堂を作るべきを説き以て祝詞に替へたり」と、当時の書簡に記している。[13]

明治九年、いわゆる思案橋事件が発生した際、その計画を政府側に密告したと疑われた本多は、身を隠すように弘前へと帰った。帰郷した本多は、藩校稽古館の後身である東奥義塾の塾頭となり、教育と伝道に努めることとなる。東奥義塾では生徒への教育のほか、美術品や物品などの博覧会や、演説・討論などを練習する「文学会」などが催され、女子部を開設して女子教育にも従事した。明治九年の明治天皇巡幸の際には、本多が御前にて英語唱歌、講演、作文の実演などを行っている。[14] 東奥義塾では当時、教師として招聘されたメソジスト派監督教会の牧師ジョン・イング（John Ing）などの影響もあり、英学と政治学とが中心的に教授され、民主的代議政治の精神や聖書講義などを積極的に行っていたといわれている。[15]

本多自身はこの帰郷を地方伝道の嚆矢として自認しており、イングとともに聖書教室や講演を行い、次第に一般市民へと浸透していき受洗者もうまれていった。本多の弟、斎と武雄も明治八年に洗礼を受けている。浸透と同時に反発も起こり、本多は教会と学校との分離を余儀なくされて、新たに教会堂が本多の自宅に設けられた。これが、今日の弘前教会の発端とされる。当時、青森において「ヤソ」となることは、かなりの偏見を受けるものだったようである。本多自身は、教会堂設立とともに「弘前公会」（弘前日本基督公会）を正式に設立し、横浜から独立する形で活動を展開した。当初は超教派主義をとっていた弘前公会だが、やがてその所属を決めざるを得なくなり、イングの影響もあってメソジスト教会に所属することとなった。所属を決めざるを得なくなったのは、超教派主義を継続していては教会運営が維持できないと判断されたためだったようで、[16] 実際、明治九年一月十五日にバラに宛てて出した本多の書簡が近年みつかっているが、そこには、現在二十四名会員がいるという弘

前公会の現状、イングの働きぶり、東奥義塾の経営に困窮していること、そのために援助を求めていること、などがつづられている。[17] もっとも、こうした教派の選択が、教派間対立、さらにはキリスト教伝道への支障を来すことを本多は強く懸念しており、同年十二月頃に横浜公会の奥野昌綱、吉田信好、バラ宛ての書簡で、「衆議改革の上メソジスト教会に連結すべきに一決いたし候……現今当地他の教会無きにより暫く連結すべし」と、弘前教会のメソジストへの所属を暫定的なものとして理解を求めた上で、教派間の対立が発生することを懸念して、これが「最要至大の一重点なる救世弘道の術を忽にするの憂無きを保せんや」と記している。そして翌明治十年には本多を校長として弘前教会日曜学校が設立され、この年に西南戦争が勃発した際には、縁故が深く、西郷隆盛への傾倒の著しかった庄内藩士の暴発防止に努めた。[18] 戦争終結から三カ月後の十二月から翌月にかけて、積雪の中、津軽半島をほぼ一周する徒歩での伝道旅行に赴いている。[19] 教会としては内憂外患を抱えながらの、伝道活動であった。

明治十五、六年頃に、おそらく信仰の道へと導こうとしていた今規雄という人物に宛てた長文の書簡の中で、本多は次のように述べている。彼の当時の信仰観が典型的に現れていると思われるので、一部を引用しよう。

> 宗教の念は天賦の性にして人類の特権とも云ふべきものなり。徳義涵養の源泉なり。愛兄は知識と徳義の領分の区別は明知し玉ふ所なり。徳義を修むるの要は性情を耕耘するにあり。性情の耕耘は無形高尚の師を必要とす。言を替て言へば上天皇帝完全無数の徳を学ぶを必要とす。即ち真正の宗教を奉じ、確然たる信仰の念を養ふに在り。

こうして、信仰→性情の発達→徳義の涵養、という図式を提示する本多は、ジェレミー・ベンサム（Jeremy Bentham）の功利学を「到底一の無限なる不可識能力に溯りて止むと云ふ。是理学の限界なり」と否定し、「基

督は、俄かに吾が恩人にして、吾が仲保なるを威徳するに至れりと。是実に真に道を信ずる者の入道する順序なり。愛兄よ、之を思ひ玉へ」と訴えかける。本多にとってキリスト教信仰とは、人間のみに与えられた特権であり、徳義や性情の源泉であり、知識や功利学では達し得ない真理への道程にほかならなかった。[20]

こうしてみると、藩政から教育へ、そして伝道へと順調に歩を進めていったかに見える本多だが、実際には、伝道のみに専念する時期にはいたっていなかった。当時の本多を支配していたもう一つの関心、それは自由民権運動である。

三、自由民権運動

明治十一年、本多が正式に東奥義塾の塾長に就任した頃、本多と、盟友の菊池九郎を中心に「共同会」なる政治結社が設立された。国権の拡張と民権の伸張をうたった団体で、地方における民権思想の普及という啓蒙的観点が重視されていたといわれている。毎週一回公会演説会を開き、義塾の教職員や生徒が積極的に参加した。十三年一月頃には本多と菊池が中心となって国会開設建白書を提出する運動が開始され、二月に「四十万余同胞兄弟ニ告ク」と題する檄文を配布し、条約改正がいまだ実現せず、中国との関係が悪化し、不均等な課税に苦しむ中にあって、「今日ノ日本人民」が求めるのは「人間自由ノ権」であり、そのためには「国会ヲ開キテ立法権ヲ人民ニ与フルヨリ外ナシ」と主張し、[21]東奥義塾では有志の会合が開かれ、県内で遊説が展開、約三千名の同意を得たと言われている。[22]その上で三月二十七日、県内有志が青森蓮華寺に集合して建白書を可決し、本多がこれを携えて上京、本多と中市稲太郎両名の名で元老院に提出した。[23]建白書は、次のように自らの主張を展開している。[24]

庸一等感憤交発シ仰テ聖意ノ辱ナキヲ思ヒ伏シテ国運ノ替ヲ恐レ今ニ及テ早ク大憲ヲ制シ国会ヲ開クル所謂ル民心ヲ安シ元気ヲ張ルノ要務ニシテ庸一等臣民ノ聖意ヲ体シ隆運ヲ計ルモ亦タ此ニ外ナラサルヲ知ル抑モ国家也ハ群情ヲ通暢シ衆智ヲ換易スルノ処ナリ

建白書は、国内が乱れ、政府の執政もおろそかな現状では国際的な競争に敗れると危機感を強調し、その処方箋として国家の開設を提示している。国権と民権とが交錯する当時の民権家の典型的な思想パターンが反映されているとみてよかろう。

青森での民権運動はその後さらなる拡大をみせていくが、本多自身の立ち位置は、次第に退いていく。その要因として『本多庸一伝』は、「ヤソ」であることへの偏見、外国人を教師として招聘するなど東奥義塾でのラディカルな教育改革、そして共同会による急進的政治活動への「保守派の巻き返し」がそこにあったとみている。実際、生徒へのキリスト教説教に対しては「怪しからぬ」という「声高々」であったという[25]から、このあたりは事実であろう。その帰結として、十六年四月か五月頃、共同会は解散、本多は義塾塾頭の座を去ることになった[26]。本多自身はこの間の経緯について、のちに明治三十七年四月三日の青山学院における演説で次のように語っている[27]。

此に一つ大変が起って来ました。といふのは、本多は自由党で耶蘇だから、彼を東奥義塾に置いてはいかぬといふ政敵からの攻撃で、終には主人なる旧知事（津軽―引用者）を通して迫って来たのであります。……平素其の人の馬前には一死をも辞せないと思ふて居りまする主人の困苦せられるゝには、忍ぶ事が出来ませんで、終に義塾を引くことになりました。

津軽家を通しての、保守派の巻き返しであった。[28] 保守派は県知事を通じて宮内大臣に通報し、義塾に資金を支出していた関係から類を免れたいと考えた津軽家側が圧力をかけてきたといわれている。[29]

かくして、いわば県内政界の少数左派勢力となった本多だが、かろうじて、青森県会議員としての地位は保持しており、その後まもなく、県内の旧津軽対旧南部の勢力争いを仲裁すべく、県会議長に選出された。[30] 両者の対立構造の間に入り、議長として二年間、その仲裁に努めたといわれている。[31] 本多が中津軽郡の補欠選挙で県会議員に当選したのは明治十四年十月二日で、以後当選を重ね、明治十七年六月二十三日には議長に選出され、十九年二月までその任にあった。[32]

なお、すでに引用した今規雄宛書簡はちょうどこの頃に書かれたものであり、本多は、一方では真理への道としてキリスト者として歩み、一方では、その道を現実世界に展開させる方策として、政治への道を歩んでいた。橋本正信が指摘するように、「万人平等の信仰を社会的に実現しようとするキリスト教徒の立場から民権運動に入」[33]ったのが本多であり、いわば「信仰も政治も」、というのが、この時点での彼の姿勢であった。

青森県議会では議長あるいは議員として、本多は東京―青森間の鉄道敷設運動や大学区の誘致運動に従事するなど、地方政治に奔走した。しかしその間の明治十九年七月十三日、心臓麻痺によって妻みよを失う。大学区の設置も仙台に破れた失意の本多は、次第に政治に熱意を失い、その二カ月後、仙台メソジスト教会牧師に任命されて、仙台に赴任することになる。[34] 本多は前掲の青山学院での説教で、県議会での形成が不利となり、妻を失ったことで、「於是私は大に悟る所があって、政事屋を止めんと決心」したと語っている。[35] 仙台では、宣教師スワルツ（H. W. Swartzs）が仙台メソジスト教会を設立したばかりであり、盟友の押川方義が仙台神学校（のちの東北学院）を核としながら伝道を展開していた。ここで約一年間活動した後、本多は明治二十年九月、東京英和学

校（のちの青山学院）に招かれて上京し、その校長に就任することになる。もともとアメリカのメソジスト派監督教会によって設立された美以神学校と、やはりアメリカのメソジスト派が設立した耕教学舎（のちの東京英学校）とが合併して明治十五年に発足していたのが東京英和学校で、神学科と普通科が設置され、本多は明治二十年八月、青山教会牧師兼東京英和学校進学科教授となり、翌月には同校の校主に就任した。校主としての本多は、青年キリスト信者の養成をもっとも重視し、日本や東アジアへの伝道をも目標として掲げた。[36]

四、「信仰」か「政治」か

こうして東洋英和学校校主として活動した本多は、明治二十一年九月十八日、アメリカのメソジスト派教会監督のファウラー（C. F. Fawlar）の招待によって、渡米することとなった。

ここから約二年間に及ぶ渡米生活の中で、本多を支配した葛藤が、文字どおり「信仰」か「政治」か、をめぐるそれであった。帝国議会開会を目前にした本多は、宗教と政治、双方に関心を抱きながら、その視察のために渡米したのである。一度は挫折した政治の道も、完全に放棄していたわけではなかった。本多自身、前掲の青山学院での演説で、「私は宗教々育の視察が目的でありましたが、以前覚えもあるので政事方面にも視線が向いて居た」[37]と告白している。実際、明治二十年夏には大同団結運動のために後藤象二郎が青森を訪れた際には、これに警戒を呼びかける政談演説を行っており、[38]「東洋未曾有の時期に際し国士として政治家として国家の為に尽すの念なかりしに非ざるべし」[39]という本人はもとより、旧主津軽家や、津軽家と関係の深い近衛家（最後の藩主津軽承昭の養嗣子・英麿は近衛忠房の子）からも、政界入りを望まれていたという。岡田哲蔵も、「後年彼（本多―引用者）自身が語るところによれば、日本の憲法に就ては米国新聞も種々書き立てた。彼は宗教視察を目的として

来たが、政事方面にも視線が向つて居た。国からは屢々飛報が来る。友人も皆勧めて起つべきは今なりといふ」と伝えている。[40] 在米中の本多は議会政治の先進国たる米国の政情視察を続けたようだが、ここで、彼はひとつの選択を迫られることになる。明治二十二年二月十一日に公布された衆議院議員選挙法は、第三章で被選挙人資格を定め、「神官及諸宗ノ僧侶又ハ教師ハ被選人タルコトヲ得ズ」（第十二条）[41] と規定していたため、もし本多が衆議院議員選に出馬する場合、キリスト教教師の座を降りなければならなくなったのである。アメリカから青森県庁にこの件について照会する手紙を送った本多は、やはり教師の座が障害になることを確認し、「議員たらんか宗教家たる能はず、宗教家を固守せんには議員たる能はず二者其の一を選ぶといふ場合に当って、数ヶ月間大いに煩悶」[42] することになった。[43] その結果、本多がたどり着いた境地について、岡田哲蔵は次のように記している。ペンシルヴァニア州滞在中に岩村透が訪問した際、本多は呆然として陸橋の上に立って列車の近づくのも気づかず、あやうく身を翻して衝突を免れた、という場面である。[44]

> 岩村氏当時の状況を記して曰く、『先生の頭髪は風を切って進む列車の為に秋の薄の如く浪打ちしを尚よく記憶す、此一事にて如何程危険の地にありしかを察すべし』と。蓋し此の危機を脱せしは一には先生の沈勇と武士の修養とによると雖、先生が列車の近邇するも知らざりし程に、何物をか沈思黙想せらるの際突然此事あり。先生が之を以て上天の警告と覚れる殆ど疑なきが如し。昔者雷電その友を斃してルーテル霊眼を開くの一刹那が欧州宗教改革史の逸すべからざる要点たりとせば、このピッツトン駅の一事また日本基督教史の要点たらざらにや。先生の転機かくの如くにして至れり。先生は全然多忙なる世界に断念せり。

煩悶葛藤の末、鉄橋に立った本多は、列車に轢かれそうになった、その瞬間に、神の啓示を悟ったというわけ

である。本多自身、この回心の体験を生涯あまり他人に語らなかったというが、後年その真偽を尋ねられると、誰かはいえないが「低い声」に励まされて、牧師としての「決心を固めた」と語っている。[45] こう決断した本多は、ニュージャージー州のドゥルー神学校で勉学に励み、政界参加の要請も断って、明治二十三年六月に帰国した。[46]

五、キリスト教と武士道

先述したとおり、本多にとってキリスト教信仰は、徳義の源泉であった。しかし、もともと武士として育てられ、戦い、働いた彼にとって、徳義はキリスト教以前に武士精神として付与されていた価値観であり、キリスト教は、いわばその徳義を補完し、正当化し、あるいは改善する機能を有したと考えられる。換言すれば、徳義を重んじる武士であった本多は、キリスト教抜きでも、徳義をある程度保持してふるまえる、というジレンマを抱えていた。明治二十五年九月十三日に別所梅之助に宛てた書簡のなかで、当時病床にあった本多は次のように述べている。[47]

> 信仰の生命は感恩畏敬の二ツにあること、奉存候。此五週間病床にありて大に感じたるは、自分の神を畏敬するの浅き事なり。其結果として罪悪を悪むことの深からざることなり。実に慚愧に不堪候。嗚呼生等は僅かに徳義上の意志力により外見の罪悪を免るゝ而已。若し其霊情之実情を見れば実に憐れむべきなり。

本多は、自らの信仰の浅いことを悔い、且つ、その罪を徳義上の意志の力によって免れている事実に、愕然としたのである。

では本多にとって、武士道とキリスト教とはいかなる関係を有するものとして、認識されていったのであろうか。この書簡から約十年後の明治三十七年十二月号の『中央公論』に、本多は「武士道は基督教に酷似す」という文章を寄せている。ここで本多は、タイトルどおり、「武士道と基督教とが或る類似の点を有する」ことについて論じ、武士道における忠義・廉恥などの精神は、君臣関係から生じたものにほかならず、日本の場合、それが「万世一系」の君臣政体の存続の故に発達してきた、と述べている。かくして、「武士道なるものは由来専制の国に発生し、専制君主の下に発達せるものにして、云はゞ専制封建の遺物也」とみる本多は、これが日清戦争における戦勝を生み、日露戦争でも真価を世界に証明しつつあるとして、武士道を遺物として忘れ去るのではなく、「保存し養生し、益々発揮」させることを期待した。そして、武士道が君臣関係における忠義の世界を重んじることから、キリスト教における神（君主）と信徒（家臣）との関係に類似しているとして、「神と人との相違こそあれ、基督教に於て神を信じ、神を尊崇し、父とし主とし仕ふるは、武士道に於て臣下が君に対すると同様の精神に基づく」と結論する。[48] 自らの信仰においては、徳義の面で葛藤を生んだ武士道とキリスト教との関係は、社会的には忠義の面において共通し、且つ、その有用性を発揮すべきだと考えられたのである。本多自身、維新後も旧主・津軽家に強い忠誠心を抱いていたことは、すでに述べたとおりである。

六、むすびに代えて

本多はキリスト教信仰の道を歩みつつ、その理念の実現手段として政治を選び、やがてその両者の道の選択を余儀なくされたとき、葛藤の末、信仰を選んだ。ともあれ、彼は職業的「政治家」（政事屋）の道を断念したのであり、「政治」（政事）そのものに無関心だったわけではない。

日本初の政治学者の一人である小野塚喜平次（東京帝国大学政治学講座教授）が『政治学大綱』（博文館）を刊行したのは、本多がキリスト者としての活動を社会的にきわめて活発に展開していた明治三十六年のことである。小野塚はここで「政治学」について、国家について事実的説明を与え、その政策の基礎を論じるものだと定義しており[49]、その意味で「政治」は、国家とその政策を指していることになるが、本多は、こうした我が国政治学の原初的定義による「政治」という観点からして、きわめて「政治的」なキリスト者であった。国家とその政策とに、職業的政治家としてではなく、キリスト者という立場から、積極的に関わっていったのである。

一例を挙げれば、本多が「政治家」の道を断念してまもなくの明治二十七年、日清戦争が勃発する。本多は清韓事件基督同志会を結成してこの戦争を「義戦」と訴える慰問活動を展開し、戦争をキリスト者の立場から肯定し、軍人の心構えを説き、従軍者の治療や遺族や留守家族の慰問活動などを実践した。それは、その国家観もさることながら、これがキリスト教伝道の絶好の機会と捉えられたからにほかならない[50]。十年後の日露戦争に際しても、やはり「義戦論」の立場から国民の士気高揚を訴え、この戦争が「キリスト教対異教徒」という構造に陥らないよう、国内のロシア正教の保護に奔走した。政府側もこうした構図の回避のため、国内の宗教対立を懸念しており、桂太郎首相は本多と会見して、対立を回避するようプロテスタント各派に周知徹底する役割を担うことになった[51]。こうした行動の背景には、従来、その士族的ナショナリズムとともに、国民から冷たい視線を浴びせられることの多かったキリスト教の社会的地位を向上させ、青山学院を守るための政治との「取引」である、という指摘もあるが[52]、たしかに、そうした「意図」を内包しながら、現実政治と「取引」しようというしたたかな戦略を、民権運動を指導し、「政治家」としての遍歴を持つこのキリスト者は、持っていた。

本多は日記をつけていた。それ自体は現存していないものの、近年、明治三十年代後半のこれを岡田哲蔵が「本多先生日記抜粋」として書き写していたものが発見された[53]。これによると、日露戦争勃発直後の明治三十七

年四月八日条には、次のように記されている。[54]

伊藤、大山外各大臣等列席の処にて布教師のことを語れり。其結果桂総理が十時より十一時の間に面会を欲する由を直に永田町より至れば桂総理は内地の誤解を解かんが為近日告諭を出し又之を外地にも及ぼさんとす併て各教会にも亦外地宣教師にも之を通じそれによりて寺内大臣呼で来り段々誤りをる上遂に内外人の慰問使を送ることとなり

これにより、キリスト教の布教師派遣について伊藤博文や大山巌に申し入れたところから、桂との面談が実現し、そして宗教戦争という構図の回避に話題が及び、実際に慰問使の派遣も陸軍の承認をもって認められたことがわかる。[55][56]

この翌日、本多は日本福音同盟会長名をもって声明を出し、日露戦争は「宗教の異同」によって起こったというのは「誤解」であり、「政府の主意」は「国論の本旨を貫徹」するためだと述べ、そのために国内のロシア人を保護し、こうした政策にキリスト教側も協力してほしいと呼びかけている。当時、神仏各宗には「管長」が置かれて一定の自治権を有していたが、キリスト教にはこれがまだ存在しないため、本多がその役割を担う形になっている。当時における本多のキリスト教界における重みが理解されよう。[57]本多は元老や総理と直接パイプを持つ、きわめて「政治的」なキリスト者であり、その外地伝道という信仰的目標もまた、現実政治というフィルターを通して実現していったのである。そして本多は自ら慰問使となって、大陸に赴いた。[58]

権力との接点を維持しながら、キリスト教界をまとめ、あるいは権力闘争の仲裁にあたった、その融和的側面に、彼のキリスト者としての、また政治家としての特色が現れている。本多が没したとき、その追悼会で内村鑑三は、「本多君の特性は平和であります、『やわらぎ』であります」と述べ、県会議長として旧南部と旧津軽の対

立を仲裁し、メソジスト三派を結合させ、さらにキリスト教諸派も一致せんとしたとして、「平和は君の天然性でありました」と述べた。そして、本多が自覚していたとおり、武士的キリスト教をもって自認していた内村もまた、本多をして「君はキリストの弟子と成る前に真の日本武士であつたのであります」と指摘している。(59)

我々は、その行動の是非はともかく、「政治家」を捨てながらも「政治」を捨てず、「武士」を捨てながらも「武士道」を捨てなかった、この希有な「政治的」「武士的」キリスト者の足跡を、あらためて民権運動史、キリスト教史の上に刻印すべきであろう。

（1）拙著『近代日本の戦争と宗教』（講談社、平成二二年）第五章、参照。

（2）岡田哲蔵『本多庸一伝』（日独書院、昭和一〇年）、青山学院編『本多庸一』（青山学院、昭和四三年）。このほか、本多の青年期の伝記的研究として、本多繁「本多庸一及その時代」（『宮城学院女子大学研究論文集』第八号、昭和三〇年）、がある。

（3）主な研究としては、本多繁『明治宗教家の書簡と履歴書から—本多庸一とその家族』（明治プロテスタンティズム研究所、平成一三年）、野口伐名「本多庸一のバラ塾におけるキリスト教の出会いと受容と発心の問題」（弘前学院大学地域総合文化研究所編『地域学』第一〇巻、弘前学院大学、平成二四年、所収）、松本郁代「慈善事業協力者としての本多庸一」（前掲『地域学』第一〇巻、所収）、酒井豊「本多庸一と日本の高等教育の基盤」（青山学院大学総合研究所キリスト教文化研究部編『キリスト教大学の使命と課題—青山学院の原点と二一世紀における新たなる挑戦』教文館、平成二三年、所収）、佐々木竜太「本多庸一における日本の敬神思想・道徳思想とキリスト教」（『教育研究』第五三号、平成二一年三月）、同「本多庸一における“Man”概念の研究—青山学院の指導精神とメソディズムを中心として」（『青山学院大学文学部紀要』第四八号、平成一八年）、同「本多庸一の「基督主義」教育観における「実験」概念」（『教育研究』第四七号、平成一五年三月）、平井亮一「本多庸一小論」（『神戸海星女子学院大学・短期大学研究紀要』第一五号、昭和五一年）、藤代泰三「本多庸一とウェスレー「キリスト者の完全」」（『キリスト教社会

問題研究』第一四・一五号、昭和四四年三月）、などがある。

（4）野口伐名「日本の国士本多庸一の宣教師との出会いと「藩意識から日本国意識へ」の目覚めと形成㈠本多庸一の藩命による横浜留学の英語学習と宣教師との出会い」（『弘前学院大学社会福祉学部研究紀要』第一二号、平成二四年三月）、同「日本の国士本多庸一における明治日本の近代皇天国家国民の形成の問題Ⅰ—本多庸一の「津軽藩から日本国へ」の近代的な国家意識の目覚め㈠」（『弘前学院大学社会福祉学部研究紀要』第一一号、平成二三年三月）。このほか、本多繁「青森の自由民権運動—本多庸一を中心として」（『福音と世界』昭和五六年一〇月号）があるが、本多の関係した民権運動委関係の資料紹介であり、研究論文ではない。

（5）拙稿「片岡健吉における信仰と政治」（『法学研究』第八四巻第一一号、平成二三年一一月）、参照。

（6）気賀健生「青山学院資料センター所蔵のキリスト教貴重文献・資料　その二四—岡田哲蔵旧蔵・本多庸一関係資料」（『Wesley Hall News』第九七号、平成二〇年一〇月）、弘前学院出版会編『本多庸一資料集　岡田哲蔵旧蔵　一～三』（弘前学院出版会、平成二三年）、松本郁代「『岡田哲蔵旧蔵・本多庸一関係資料』について」（弘前学院大学地域総合文化研究所編『地域学』第七巻、弘前学院大学、平成二一年、所収）、参照。

（7）青森県議会史編纂委員会編『青森県議会史　明治元—二三年』（青森県議会、昭和三七年）、河西英通『近代日本の地域思想』（窓社、平成八年）、稲葉克夫「青森県における自由民権運動」（『弘前大学國史研究』第八四号、昭和六三年三月）、橋本正信「青森県の自由民権運動—弘前地方を中心に」（『弘前大学國史研究』第三三号、昭和四三年五月）、など。

（8）前掲『本多庸一』、二—二一頁。同書の参考文献は前掲『本多庸一資料集　岡田哲蔵旧蔵　一』に「本多先生伝記資料目録」として収録されている。本多の履歴については、「本多庸一先生履歴」（前掲『本多庸一資料集　岡田哲蔵旧蔵　二』、所収）、「本多先生年譜文献雑録」（前掲『本多庸一資料集　岡田哲蔵旧蔵　三』、所収）、も参照。

（9）前掲『本多庸一』、二六—二八頁。

（10）“My Own Convertion”（高木壬太郎『本多庸一先生遺稿』日本基督教興文協会、大正七年、所収）、pp.34. これは本多自身の英文による自叙伝である。日本語訳は小川原による。いつ語られた、あるいは書かれたものかは定かでないが、相沢文蔵は、本多の年譜などから「恐らくは、日露戦役の最中、明治三八年五月、オランダにて開催の『世

界基督教学生同盟大会』に出席した際に試みたものであろう」と推定し、その和訳を試みた上で、内容の詳しい分析を行っている（相沢文蔵「本多庸一論―明治の人々Ⅲ（Ⅰ）―（Ⅳ）」『道標』第一四号―一七号、昭和三七年三月―昭和四〇年一二月）。

(11) 前掲 "My Own Convertion"、p.4. バラからの影響について詳しくは、前掲「本多庸一のバラ塾におけるキリスト教の出会いと受容と発心の問題」、参照。

(12) 前掲『本多庸一伝』、四五頁、前掲『本多庸一』、二八―五二頁。

(13) 本多繁「本多庸一発表文献」（『宮城学院女子大学研究論文集』第一一号、昭和三二年）、九三頁。

(14) 前掲『本多庸一伝』、四五―四八頁、前掲『本多庸一』、五四―六一頁。

(15) 前掲「青森県の自由民権運動―弘前地方を中心に」、三五―三六頁。

(16) 前掲『本多庸一伝』、五六―五七頁。

(17) 山本博「本多庸一のバラ宛ての英文書簡」（『紀要（秋田桂城短期大学）』第一一号、平成一三年一〇月）、七一―七八頁。

(18) 前掲『本多庸一伝』、四五―四九頁。

(19) 前掲『本多庸一』、六二―八三頁。この伝道旅行に際して本多は日誌を書き残していたといわれているが（気賀健生「明治初期のキリスト教開拓伝道に関する史料―本多庸一の伝道日誌〔含明治一〇～一一年津軽伝道日記の翻刻〕」『青山学院大学一般教育部会論集』第一一号、昭和四五年、参照）、これは弟の斎が書いたものだという主張も存在している。これについて、筆跡などを詳細に検討した保村和良は最近、本文は庸一が書いたものを斎以外の別の人物が代筆してまとめたもので、これに庸一自身が朱筆を入れたという説得力の強い説を発表している（保村和良「「伝道日誌」の著者について」、前掲『地域学』第一〇巻、所収）参照。

(20) 前掲『本多庸一先生遺稿』、六五九―六六四頁。

(21) 前掲「青森の自由民権運動」、三五―三七頁。これは本多繁が原文の写しを翻刻したものである。

(22) 前掲『本多庸一』、八六―八九頁。

(23) 前掲『本多庸一』、八六―八九頁。

(24) 前掲「青森の自由民権運動」、三七—三九頁。これも本多繁が原文の写しを翻刻したものである。前掲『本多庸一伝』は、この起草者は陸羯南だとした上で、こうした政治への深入りについて、植村正久が「宗教に引き戻したい」と述べていたという小崎弘道の談話を伝えている（同、五〇頁）。
(25) 前掲『本多庸一伝』、五四頁。
(26) 前掲『本多庸一』、九〇—九五頁。
(27) 前掲『本多庸一先生遺稿』、二—三頁。
(28) この保守派士族の中心は、大道寺繁禎（県会議長）、笹森儀助（中津軽郡長）といった旧上士で、彼らは共同会に対抗して「陸奥帝政党」を組織した（前掲「青森県の自由民権運動—弘前地方を中心に」、四五頁）。保守派と本多側との攻防については同論文、および前掲『近代日本の地域思想』、二八頁以下、に詳しい。
(29) 前掲『本多庸一伝』、六〇頁。
(30) 前掲『本多庸一』、九五—九六頁、岡田哲蔵『我が先生』（阿部義宗、大正一四年）、二三頁。
(31) 前掲『本多庸一伝』、五一頁。
(32) 前掲『青森県議会史　明治元—二三年』、四九五—七三七頁。
(33) 前掲「青森県の自由民権運動—弘前地方を中心に」、四八頁。
(34) これにともなって青森県会議員を辞任し、明治一七年一〇月には補欠選挙が行われている（前掲『青森県議会史　明治元—二三年』、七三八頁）。
(35) 前掲『本多庸一先生遺稿』、四頁。
(36) 前掲『本多庸一』、一〇〇—一一二頁。
(37) 前掲『本多庸一先生遺稿』、五頁。
(38) 前掲『本多庸一伝』、六五—六六頁。
(39) 前掲『我が先生』、二四頁。
(40) 前掲『本多庸一伝』、八四頁。
(41) 内閣官報局編『法令全書』（明治二〇年）、二二—二三頁。

(42) 前掲『本多庸一先生遺稿』、五頁。これも明治三八年四月三日の青山学院における本多の演説の一節である。
(43) 前掲『本多庸一』、一一一―一一八頁。
(44) 前掲『我が先生』、二五―二七頁。これは、本多の葬儀の際に岩村透が岡田哲蔵に書き送った書簡をもとに作成されたものである（前掲『本多庸一』、一一八頁）。
(45) 前掲『本多庸一先生遺稿』、六頁。この「低い声」の主について本多は、いまはいえないが、「私の頭が真白になる頃」には「語ることがあるかも知れません」と、ここで語っている（同、六頁）。
(46) 前掲『本多庸一』、一一九―一二四頁。
(47) 前掲『本多庸一先生遺稿』、六六六―六六七頁。
(48) 本多庸一「武士道は基督教に酷似す」（『中央公論』第一九四号、明治三七年一二月）、七―九頁。
(49) 小野塚喜平次『政治学大綱』（博文館、明治三六年）、一三―二〇頁。
(50) 前掲『近代日本の戦争と宗教』、一一五―一二一頁。
(51) 前掲『近代日本の戦争と宗教』、一四六―一七九頁。
(52) 前掲『本多庸一』、二二六―二二八頁。
(53) 前掲「青山学院資料センター所蔵のキリスト教貴重文献・資料　その二四―岡田哲蔵旧蔵・本多庸一関係資料」、一二―一三頁。
(54) 「本多先生日記抜粋」（青山学院資料センター所蔵）、明治三七年四月八日条。
(55) 本文先述のとおり、本多は青山学院長として、キリスト者の養成とキリスト教の東アジアへの海外伝道を大きな目標として掲げていた。
(56) この頃作成されたと思われる「本多氏宿所表より」と題する資料が残されている（青山学院資料センター所蔵）。桂太郎、大山巌、大隈重信、寺内正毅、副島種臣などの名が列挙されており、本多の人脈の広さがうかがえる。
(57) 前掲『本多庸一先生遺稿』、六七八―六七九頁。
(58) 前掲『近代日本の戦争と宗教』、一七七―一七八頁。明治三七年九月一七日付で軍に従軍していた岡田哲蔵に宛てた書簡で、本多は「天命我にあり感泣奮闘せんや」と書き送っており（前掲『本多庸一資料集　岡田哲蔵旧蔵

一』、三〇八頁)、同年一〇月一九日付の岡田宛書簡では、ロシア皇帝を「老大妖怪帝」と罵倒している(同前、三一八頁)。明治三八年三月一一日付で本多から岡田哲蔵に宛てた軍事郵便では、「奉天域外滞陣あらん」云々、とある(青山学院資料センター所蔵)。

(59) 内村鑑三「日本の基督教界に於ける故本多庸一君の位置」(『聖書之研究』第一四二号、明治四五年五月)、三五—四二頁。